過ぎてしまいましたが、ユリオの誕生日本です。
2018年3月18日発行の「なんて愚かなマーキューシオ」
A5/56P/600円
で、セフレの勇ユリを書いたので、邪魔されて、小学生みたいに、
遊んでる勇ユリを書いてみました。

ユリオに特別な誕生日プレゼントを、僕は用意せねばならない。
一生の記念に残るような、一目で笑顔になって貰えるような、ユリオを幸せな気持ちにさせることができる、最高のプレゼントを。
しかし、ユリオと僕は残念なことに、壊滅的にセンスが合わなかった。

まず僕とユリオはファッションセンスが合わない。
僕はユリオの大阪のおばちゃんと見紛うような、ド派手なヤンキーセンスを、絶対後から黒歴史になって後悔する羽目になるぞ！と内心思っているし、向こうは僕の限りなく地味で安っぽい、目立たないためにあるみたいな服装をダサいと思っているし、実際にダサいと口にする。
僕もユリオくらいの年齢の頃に、日本人の平たい顔族の僕に似合うはずもないのに、雑誌に載っていた、当時から大ファンだった、ヴィクトルのファッションを真似しようとして、全く似合わない服を買った痛い過去がある。
九州のど田舎には、ヴィクトルの着ている王子様のような服は売ってないから、大会や合宿などで東京に行った時に、若者のおしゃれな街とされる原宿を回って、少しでも似てるデザインの服を探して買ったり、清水の舞台から飛び降りる思いで、同じブランドの一枚数万円もするピラピラのシャツを買った。

喜び勇んで着てはみたけど、真利ねーちゃんやミナコ先生に全く似合わないと笑われ、未だに酔っ払った時のネタにされている…。ヴィクトルと全く同じシャツを着ていても、ヴィクトルが着ているとゴージャスなのに、僕が着るととことん安っぽくて、とても同じブランドのシャツとは思えなかった。まるで低レベルのコスプレだ。
今となっては消し去りたい記憶だけど、一度しか着なかった桁が一つ違う高いシャツを、貧乏性の僕にはとてもじゃないけど勿体なくて捨てられず、実家の僕の部屋のタンスの奥で、今も静かに眠っているはずだ。僕の黒歴史。若気の至りとはいうけれど、若い時というのは、そういう誤った判断をしてしまうものなのだ。
だから僕にユリオのファッションセンスを批判する資格はない。生暖かく見守るし、いつかユリオの中で黒歴史になった時には、見なかったことにしてあげるつもりだ。

ファッションセンスだけじゃなく、僕とユリオは音楽の趣味も全く合わない。
ユリオの好きなロック系の音楽は、僕には日常的に聴くには煩すぎたし、僕の好きなクラシックやヒーリングミュージックは、ユリオは聞くと眠くなると言う。
僕は本を読むのが好きだけど、ユリオは本を読むような子じゃない。映画だってそんなには見ない。
アクセサリーが好きなようだけど、細い指や白くてほっそりとした首には似合わない、レザーや、ゴテゴテのドク

Ｄなんかのデザインの、いかにも重そうなシルバーのアクセサリーを好んでつけている。
　ユリオはユリオには、あまり似合わない骨太の格好ばかりを好んでする。
　ユリオは女の子みたいに綺麗な子だから、女の子みたいだと言われるのが嫌で、男らしい格好を好んでして、わざとガニ股で肩をいからせて歩いたりして、コーチのリリアに美しくないとか、姿勢が悪いといつも怒られている。
　こうして改めて考えてみると、僕とユリオの趣味は全く合わない。
　共通の趣味と言えば、暇つぶしにするゲームくらいだ。

　ユリオの趣味は理解できないけど、趣味の傾向は分かるから、ユリオの好きそうなシルバーアクセサリーを色々と調べてみた。
　しかし、僕にはどれが良いのかさっぱり分からなかった。
　それらは僕の好みじゃないからだ。どれを見ても全く身につけたいと思わない。
　どれもこれも同じに見える。同じように、重そうで、邪魔そうで、肩が凝りそうで、ぶっちゃけダサく見える。
　なんで、こんな中二病みたいなアクセサリーが好きなんだろう？あぁ、まだ16歳だからか。
　大体こんなデザインのアクセサリーをプレゼントした所で、喜んで貰えるのは一瞬ではないだろうか。

　そのうちユリオの中二病も完治し、プレゼントしたアクセサリーは、黒歴史と共に、机の引き出しの奥に葬り去られるのではないだろうか。僕がヴィクトルを真似して買った、僕に全く似合わない王子様みたいなシャツみたいに。
　こんなアクセサリーでも、結構なお値段がするのに。あげたものは本人の好きにすれば良いとは言っても、身につけて貰えないし、大事にして貰えないのはやっぱり悲しい。
　ユリオは一週間後に17歳になる。僕がホームリンクとしているこのロシアでは、一年後には成人の年だ。

　僕はここ数週間ずっとずっと悩んでいた。ユリオの誕生日プレゼントについて。
　悩んで悩んで、悩み切ったあげく、僕は白旗を上げ、ユリオ本人に誕生日に何が欲しいか、聞くことにした。

「ユリオ、誕生日に何が欲しい？」
　僕は単刀直入で、ユリオに聞いた。
「はぁ？　本人にそれを聞くのかよ？」
　とユリオが怪訝な顔をする。
「ユリオが好きな、シルバーアクセサリーが良いのかなと思ったけど、どれが良いのか分からなくて…。
　今、何が欲しい？　何でも買ってあげるよ。あ…、残念

ながら、予算はあるけども」
と僕が言葉を濁すように言うと、
「いらねーよ、誕生日プレゼントなんて」
と言って、ユリオがニッと歯を見せて、子供のように笑う。
ユリオは意外と、わがままを言わない。最初会った時は、どんだけわがままなクソガキなんだと思ったけど。
食べ物の好き嫌いもないし、贅沢も言わない。貧しい生活が長かったとかで、金銭感覚もとても質素だ。
「そーいう訳には行かないよ。何か、プレゼントさせてよ。
と僕は改めてユリオに聞いた。
僕は失敗したくなかったのだ。僕の初めてできた恋人に、初めてあげる誕生日プレゼントの選択を。

僕とユリオは恋人同士だ。
リリアの監視が厳しくて、キス以上のことはまだ出来てないし、僕もI6歳の子供を相手に、まずいことをするつもりはないけれど、それでも一応付き合っている。
付き合い始めたのは、ヴィクトルの師事を受けるために、僕がロシアのサンクトペテルブルクにホームリンクを移してからだから、まだ付き合い始めて半年も経ってない。
最初、嫌われてると思っていたユリオと、恋人として、付き合うことになるなんて、自分でも凄く驚いた。
現役復帰したヴィクトルは、僕のコーチの時間とは別の時間で、自分の練習をしないといけないから、とてもとても忙しかった。
ヴィクトルはロシアの英雄的な、ロシアだけじゃない世界的な人気者だから、テレビや雑誌の取材も、CMの撮影なんかの仕事も多くて、練習以外にも仕事が多かった。
そんな中、僕の慣れないロシア生活の、サポートをしてくれたのは、ヴィクトルから頼まれたユリオだった。
ロシアは英語が通じる所が少なくて、僕は毎日のようにユリオに付き合って貰って、日常品の買い物をしたり、一緒に夕食を食べて帰ったりした。
まだ未成年のユリオは、ユリオのサブコーチのリリアの家に下宿していて、まっすぐ帰ると家でも息が抜けないと言って、そのうち、僕の部屋に入り浸るようになって、一緒にゲームをするようになった。
ゲームが趣味の僕の部屋には、日本から持ってきた色々なゲームがあった。ユリオのお気に入りは、日本語が分からなくても感覚でできる、ファミコンミニに入った、ユリオが生まれる遥か前の、大昔のレトロゲームで、2000年代に生まれている美麗CGゲームを見慣れた世代のユリオからすると、逆に新しいようだった。
僕達は懐かしくも操作が単純な昔のゲームで、対戦をして遊んだ。

「今日、何時に練習終わる？　今日もゲームしに行って良いか？」
と、ユリオが毎日、目をキラキラさせて聞いてくる。
まるで、小学生が放課後に友達の家にゲームをしに行くように、ユリオは毎日僕の家にゲームをしに来た。
ゲームのし過ぎだと、ゲームは一日一時間だ！とリリアに二人揃って叱られていた。
やってることは完全に、小学生男子だった。
コンビニで飲み物とお菓子を買い、僕の部屋でファミコンミニに入っているレトロゲームを次々と試して遊んでいたけど、そのうち、ユリオは、某有名ＲＰＧをやりたいと言い出した。
仕方がないから、僕がユリオの隣に座って、随時、日本語を英語に通訳しながらゲームをした。ストーリーの面白さに定評のあるゲームだったから、ユリオがつづきが気になると言って、休日も僕の部屋に入り浸るようになった。

ゲームをしている間に、ユリオは少しひらがなが読めるようになって、レベル上げくらいなら一人でできるようになって、練習の時間が合わない時に、ゲームをするから部屋の鍵をよこせと言うから、鍵をあげた所、僕がいない時も、ユリオは勝手に僕の部屋に入るようになった。
でも、リリアがとても厳しいからユリオには門限があって、僕の部屋に泊まっていくことはなかった。

僕は可愛い弟が出来たような気持ちだった。

そのうちユリオは、僕がヴィクトルにたまに誘われて、飲みに行くのを「ずるい！」と怒りをあらわにするようになった。
さすがにヴィクトルの馴染みのバーに、十六歳の未成年を連れて行くことはできない。
食事メインの店に変更して、ユリオを一緒に連れて行くこともあったけど、僕とヴィクトルが調子良く飲んでいると、凄く嫌な顔をするようになった。
門限のあるユリオを先にタクシーに乗せて帰して、僕とヴィクトルだけで飲み直しに行くと、噛みつかれそうな勢いでブチ切れられた。
僕は酒癖が悪くて、ユリオに多大な迷惑をかけたことがあったから、ユリオは僕が酒を飲むのを嫌がってるんだとずっと思ってた。

ある日、新しいプログラムを作るために、時間がないから、ヴィクトルとプログラムの方向性を合わせるために、僕がヴィクトルの家に泊まって、合宿と称して根を詰めて、検討することになった。
ユリオにいつものように、ゲームをしに行って良いかと聞かれ、僕が今日はヴィクトルと合宿だからと家にいないと断った所、

「ずるい！俺も行く！俺もヴィクトルの部屋に泊まる！」
と突然、ユリオは喚くように言い出した。
「ずるいって言われても…」
「俺もフリーのプログラムを、ヴィクトルに作って貰う予定だし！俺も一緒に泊まる！合宿する！」
「遊びに行くわけじゃないよ。面白いことなんか何もないよ。
ユリオがヴィクトルと合宿するなら、僕とは別でやってよ。僕が終わった後に、ヴィクトルの家に泊まって二人でやれば良いよ」
「なんでだよ！一緒にやった方が効率的だろ？」
「いや、不効率だと思うよ！絶対別にやった方が早いよ！」
珍しく僕達は言い合いになった。
でもユリオはムキになって、絶対俺も泊まると言い張っていた。
「……そんな子供っぽいこと言わないでよ。ゲームなら、僕の部屋に勝手に入ってやって良いからさ」
と宥めると、
「子供扱いすんじゃねぇ！」
とまた目を三角にしてムキになる。僕はユリオの頑なな態度が、前々から凄く不思議だった。
「ねぇ？ユリオはなんで、そんなに僕とヴィクトルを二人きりにしたくないの？
僕は別にヴィクトルを取ったり、独り占めしたりしないよ」
と前に、ヴィクトルのコーチ権を賭けて、ユリオと勝負したことのある僕が、苦笑いしながら言うと、
「はぁ？別にそんなこと心配してねーし！」
と顔に出して、ムキになる。
「いつもいつも、俺だけ仲間はずれかよ！」
「ユリオを仲間外れにしてる訳じゃないよー。
大体、僕とヴィクトルが一緒にいる時間より、ユリオと僕が一緒にいる時間のがずっと長いじゃないか。
だからって、ヴィクトルを僕達が仲間はずれしてる訳じゃないだろ？」
とよしよしと頭を撫でて宥める。
子供扱いするなと嫌がるかと思ったけど、ぶーっと頬を膨らましたまま、おとなしく僕に頭を撫でられている。
「この埋め合わせはそのうちするから、言うこと聞いてよ」
とまるで彼女に言うみたいなことを言うと、
「絶対だぞ！」
とキレられる。

僕も日本の大会に出なきゃいけなかったり、日本での仕事が色々あるから、長期間、日本に戻ることも多かった。
その間もユリオに部屋の鍵を預けっぱなしにしていた。
取り返す必要性も感じなかったし。

二週間の帰国からサンクトペテルブルクに戻ると、ユリオは開口一番で、
「今夜、ゲームしに行って良いか？」
と弾んだ声で聞いてきた。
日本語が読めないからこれ以上、ストーリーを進めることができない所まで来て、ユリオはコツコツと僕のいない間、僕の部屋に入り浸って、レベル上げをしたらしく、レベルがカンストしていた。
「……戻ってきたばかりで、僕、疲れてるんだけど」
と苦笑いすると、
「通訳してくれるだけで良いから！」
と鼻息荒く言ってくる。
本当にゲームが好きだなとその時は、感心した。
「ユーリ・プリセツキー、子供みたいなワガママ言うんじゃありません！」
とその場にいたリリアがユリオを注意する。
「ウルセェなぁ！　良いだろ？　な？　カツ丼！」
と腕にしがみ付かれて、甘えるような顔で、腕を揺らされて、僕はダメだと言えなかった。
「良いけど。一時間だけだよー」
と僕はリリアの手前、真面目に答える。
「サンキュー！」
と満面の笑みで正面から胸にギュッとしがみ付かれて、なぜか胸がドキッとした。
ユリオは僕に慣れたのか、どんどん僕に遠慮なく、ボディタッチしてくるようになった。ヴィクトルと一緒だ。
僕はその頃、ロシア人は慣れるまでは愛想が悪いけど、慣れるとボディタッチをしてくる人種だと認識していた。

ゲームをしている時、ユリオはまるで僕にもたれるようにぴったりと僕にくっついて座るようになった。
僕が洗濯や掃除などの家の事をするために、立ち上がって色々していると、早く隣に座って、一緒にゲーム画面を見るようにねだるようになった。
「勝手に進めていいよ」
と言っても、
「一緒に見たいんだよ！」
と言って、僕が隣に座るのを、ご主人様の帰りを待つ、犬のようにおとなしく待っている。
レベルがカンストしてるから、サクサクとゲームは進んで行く。ただし、お金は足りなくなって、お金を集めるための戦闘は必要だったけど。
僕にくっついて座るユリオが、まるで甘えるように、日本語でなんて書いてあるのか聞いてくるようになった。
「ユリオが一人でできるように、英語版の同じゲーム買おうか？昔のだから、すぐ見つかるかはわからないけど…」
と言うと、
「レベル上げからやり直しかよ？やなこった」
と断られた。確かに、保存データのコンバートはできな

いかもしれない…。
「このシリーズのゲームをやりたければ、英語版もあると思うから、次は英語版を買えば良いと思うよ。最新の奴なら、家でもできるし」
「んー。これ3だろ？　4がやりたい。あと、1と2」
「えー？古い奴からやりたいの？僕もさすがに昔のハードは持ってないよー。いや、スマートフォンアプリや、データ配信とかであるかもしれないな。調べてみるよ。英語版があればユリオも一人でできるよね」
「……カツ丼と一緒にやりたい」
「え？　僕と一緒にやりたいの？」
意外な言葉に、思わず聞き返すと、ユリオがテレビ画面を見たまま、うんと頷く。
いつの間にかすっかり懐かれている。

レベルがカンストしてるからサクサクとゲームを進めることができて、一週間後に一緒にエンディングを見た。自分でゲームをやった訳じゃないけど、隣で人がやるゲームを眺めているのは、それなりに面白かった。
「これでもう僕の部屋に入り浸らなくて済むね」
と言うと、なぜかユリオは不機嫌そうな顔をしていた。

その夜、スマートフォンアプリでも、そのシリーズの一番最初のゲームができることを、ネットの検索で調べて知った。
翌日、練習開始前のロッカールームで、ユリオと顔を合わせた時に、呼び止めてそのことを教えてあげた。ロッカールームには、たまたま僕とユリオの二人しかいなかった。
「英語版だし、スマートフォンで出来るから、ユリオも一人でゲームできるでしょ？　もう僕の部屋にわざわざ来なくて済むね！」
って。僕はユリオにグットニュースを教えてあげたつもりだった。
でもユリオは、
「俺が家に来るのがそんなに嫌なのかよ！」
と突然、今もに泣きそうな顔でブチ切れたからびっくりした。
「そ…、そうじゃないけど。でも僕がいないとゲームが進められないのも、わざわざ僕の部屋にゲームするためだけに来るのも面倒くさいだろ？
スマートフォンで一人でできたら、便利じゃない？」
と僕が呆気にとられつつ、おどおど答えると、
「別にめんどくさくないし…」
と拗ねた顔で呟く。
「あ！　別に僕の部屋の鍵を返せって意味で言ったんじゃないよ？　引き続き、僕の部屋を息抜きや、避難場所に使ってくれても良いしさ。
リリア、厳しいもんね。避難場所も必要だよね！　僕、また近々、日本に戻らなきゃいけないし。その間も部屋を

好きに使って良いよ。でも汚さないで欲しいから、ゴミさえ持ち帰ってくれれば…」
と思わず、機嫌を取るように言うと、
「……お前がいる時に行きたい」
とそっぽを向いて言った。
「はぁ？」
と意味がわからなくて聞き返すと、
「ゲームなんか言い訳に決まってんだろ！お前と一緒にいたかったんだよ！察しろよ！バーカ！」
と真っ赤な顔で、今にも泣きそうな顔でキレられた。
僕の顔もカーッと熱くなる。胸がドキドキする。
か、可愛い……。突然、ユリオが可愛く見えるようになった。理由がわからない。
しばし、お互い真っ赤な顔で、奇妙な沈黙が続く。
「……何か言うことねーのかよ？」
「……なんで、僕と一緒にいたかったの？」
と恐る恐る聞くと、
「てめぇが好きだからに決まってんだろ！」
と怒鳴り返されて、同時に顔がかーっと耳まで熱くなった。ドキドキする。
「キモいだろ？男の俺に好きだって言われて」
と自嘲気味に鼻で笑われて、
「えっ？　キモくないよ！　っていうか嬉しいよ！」
と挙動不審で腕を振り回して、否定する。
「嬉しい？」
と胡散臭そうに眉間に皺を寄せるユリオに、僕は情けない顔をしているだろう、真っ赤になった熱い顔を手で隠すように押さえて、震える唇で、
「……どうしよう。凄く嬉しい…」
と情けない声で呟く。
「どうしようってなんだよ、それ」
「……なんだか、涙が出そうなほど嬉しい」
今まで感じたことのない感情でいっぱいになって、僕の視界が歪む。
「涙が出そうなほどって、もう泣いてんじゃねーかよ」
とユリオが僕の顔を見て、おかしそうに笑った。
そして、
「もしかして、お前も俺のこと、好きなのか？」
と真面目な顔で聞いてきた。
「そういうことなのかな？」
「お前の気持ちなんだから、俺にわかるはずないだろ！」
「ユリオに好きだって言って貰えて、何故か凄く嬉しいんだ。良い成績が出た時の喜びとは、違う種類だけど、同じくらい嬉しい」
僕は今まで片思いばかりで、誰かにまともに好きになって貰ったことはなかった。誰かに好きになって貰えるって、こんなに嬉しいことなんだ、と初めて知った。
「じゃあ俺のこと好きってことだろ？」
と弾んだ声で嬉しそうに聞いてくるユリオに、
「そうだね。そうかもしれない」

と僕は素直に頷く。ユリオをそんな目で見たことは、それまで一度もなかったけれど。でも僕はユリオと一緒にいるのは居心地が良かった。

それに僕の目には今、くるくる表情が変わって忙しそうなユリオがとても愛おしく、可愛らしく見える。

「じゃあ、付き合おうぜ、俺達」

「付き合うって一体、何するの？　もう毎日、一緒にゲームして遊んでるのに」

まともな恋愛経験のない僕は、何をするのか全く想像できなかった。

「そりゃ、毎日キスしたりとか」

キス…。経験したことはないけれど、とても素敵そうだ。

「セックスしたりとか」

「それはダメでしょ？！　ユリオ、まだ未成年だよ！犯罪だよ！僕、捕まっちゃうよ！」

と慌てて止めると、ちぇっと舌打ちする。

「とりあえず、一回、キスしてみねぇ？」

といたずらっぽく聞かれて、僕は嫌だと言えなかった。

吸い込まれるようにユリオの肩に手を置いて、顔を近づけた。

初めてしたキスはレモンの味はしなかったけれど、柔らかくて、暖かくて、気持ちが良くて、僕達は何度も夢中になって触れるだけのキスをした。まるで夢みたいに幸せだった。

気がついたら、練習の開始時間が過ぎていて、僕達は慌てて、走って練習に行った。

対戦ゲームに夢中になってて、時間が過ぎたと僕は開口一番、人を待たすのは平気な癖に、待たされるとすぐ怒るヴィクトルに謝る。

僕は、なんだか夢の続きみたいにずっとぼーっとしていて、ヴィクトルに集中が足りないと何度も怒られた。

何度も、同じリンクで練習中のユリオの姿をつい目で追ってしまって、そのままぼーっと眺めた。

僕と目が合うと、ユリオはニッと嬉しそうに笑って、軽く手を振って返す。僕はそれだけで何故か胸が弾んで嬉しくなる。

昨日までのユリオと全然違って見えた。何倍も綺麗で可愛くて魅力的でセクシーで、愛おしく僕の目には映った。ずっと見ていたいと思った。

恋に落ちるとはこーいうことか！と、僕は自分の身の急激な変化で恋を知った。

その日、気もそぞろでジャンプを失敗しまくって、自己嫌悪に陥りながらも、フラフラ僕がリンクサイドを歩いていると、突然、リリアに呼び止められた。

「ユウリ・カツキ。あなたはこんな話を聞いたことがあるかしら。

バレリーナは、前日セックスしたかどうかを、見る人が見れば分かるって言われてるのよ？」

「はぃ？！」

僕はいきなりのとんでもないリリアの発言に、間抜けな声をあげた。

堅物そうなリリアに、なんで突然そんな飲み屋で交わすような、セクハラトリビアを、練習場であるリンクで聞かされないといけないのか分からなかった。

「……なんでいきなり、そんなこと？」

と僕が恐る恐る尋ねると、

「私が見れば分かると言うこと」

と目をカッと見開いて、僕を脅すように言ったから、あまりの迫力に本当に心臓が止まりそうになった。

「あの子が大事な時期なのは、分かっているわよね？大人として、節度ある理性的な交際をお願いするわよ？」

そのままズカズカとリリアが腕を組んだまま僕にありえないほど近づいてきて、超近距離から目を睨まれながら言われた。僕はそのまま石になるかと思った。メドューサの目に睨まれたような気持ちだった。

「は…、はい……」

と僕はあまりの恐怖に、背中を汗びっしょりにして、目を泳がせながらブンブン頷く。

隠したり、ごまかしたりするような余裕は、その時の僕には一切なかった。

僕はペコペコと頭を下げて、「ごめんなさい」、「すみませんでした」と、リリアにもう良いと言われるまで謝罪を続けた。

もう良いと僕に頭を上げさせてからも、リリアはいかにも胡散臭そうに、僕をずっと睨んでいた。僕は信用されていない。

ユリオが、コーチのリリアに、僕とおつきあいを始めたことを速攻で言ったのかと思った。

でも後からユリオに聞いた所、「そんなこと言う訳ねーだろ！！」と恥ずかしそうに顔を真っ赤にしてキレられた。

どうもリリアは、僕とユリオの態度に変化があったのを、一目で見て、僕達が交際を始めたことに気付いたようだ。女性は感が良いって言うけど、恐ろしい。

リリアがユリオに絶対外泊を許さない所か、門限まで厳しく言い渡しているから、お付き合いを始めても、ユリオは僕の部屋に泊まることはできなかった。

ユリオは焦って先に進みたがっていたけど、僕もさすがに未成年に手を出すのはまずいと思っていたから、ある意味、好都合だった。

僕達はまぁまぁうまく行っている。趣味は全く合わない

し、年齢は8歳も違ったけど。

僕は恋愛経験がほぼないに等しいから、恋愛経験値で言えば、同レベルだったのも良かったのだと思う。

僕達はお互いに忙しくて時間のすれ違いが多かったし、僕が日本で行われる大会に出ないといけなくて、数週間とか会えないこともざらにあった。遠距離恋愛だ。

僕達が付き合い始めてからは、リリアが練習が終わると、当たり前のようにほぼ無理やり、ユリオを連れて帰ってしまうようになって、僕達は練習場であるスケートリンクにいる時しか一緒にいられなくなった。

リリアは僕達の付き合い自体には反対してはいなかったけれど、ユリオが未成年の間は、僕に節度あるお付き合いを求めていた。

そして若者の性欲を一切信用していないらしく、徹底的にユリオの貞操を守るために行動するようになった。まるで若い娘を持つ、厳しい母親みたいに。

付き合い始める前の方が、よっぽど僕達は一緒にいられた。それでもユリオはなんとか、リリアの家を抜け出して、僕の部屋に突然飛び込んで来たりしたけれど、すぐにリリアが僕の部屋まで、ユリオを迎えに来たから、前のようにゆっくりはできなかった。

だから僕達のデートといえば、スケートリンクに併設された食堂で、アスリート用に計算された、味気ないランチを一緒に食べるくらいだった。ユリオが僕の部屋に来れなくなったから、ゲームはポータブルゲームで対戦して遊ぶようになった。

毎日のように練習後、「僕の部屋に遊びに行く！」と言い張るユリオとリリアが激しくバトルしていた。

「ゲームしに行くだけだって！門限までには戻るから良いだろ！」

と切れるユリオに、リリアが顔色一つ変えずに、

「いけません。今日はまっすぐ帰って、ロシア・ナショナル・バレエのくるみ割り人形のＤＶＤを見るのです」

と淡々と命令する。

リリアに悉く二人きりにされるのを邪魔される僕達のことを、ヴィクトルは、

「まるでロミオとジュリエットみたいだね」

と言って、笑ってた。

見かねて、ヴィクトルも助け舟を出してくれるようになった。

結果、食事に出かけようとすると、リリアに頼まれたヴィクトルがお目付役のようについてくるようになった。

でも、ヴィクトルは話がわかるから、僕達に話を合わせてくれて、途中まで同行してから、僕達を二人っきりにしてくれて、わざわざ門限前に車でユリオを迎えにきて、リリアの家まで送り届けてくれた。

ヴィクトルが協力してくれた時だけ僕達は、部屋でゆっくり一緒にいることができた。

僕達は体をくっつけて並んで床に座って、寒くなってきたから一つの毛布にくるまって、邪魔をされてばかりでなかなか進まないＲＰＧゲームで、ヴィクトルが迎えにくるまで遊んだ。
ユリオと一つの毛布にくるまってくっついているのは、暖かくて、とても気持ちが良くて、幸せな時間だった。

仕方がないから僕達は、人の目を盗んで毎日こっそりキスをした。僕とユリオじゃ、人前でキスをすることは出来ないから、人目のない場所を探し、最低、一日一回はノルマのようにキスをしていた。
どうしても時間が合わず、人の目を盗むことができずに、キスができなかった時は、ユリオがリリアに連れ帰られる直前に、トイレで待ち合わせしてこっそりキスをした。

そんな些細なことも、ちょっとしたゲームみたいで楽しかった。
僕は２４歳にもなって、中高生みたいなことをして、何をしてるんだと思うけど。
それでも十分、僕は満足だったし、幸せだった。ユリオは不満そうだったけど。

そんな訳で僕は生まれて始めて経験する、恋人の誕生日をめちゃくちゃ張り切っていた。
僕達はデートもなかなかできなければ、二人っきりになることも出来ない。プレゼントくらいは良い所を見せたい。

「いらねーって。前にも言ったろ。ロシアじゃ、日本みたいに誕生日にいちいち馬鹿騒ぎはしねーんだよ」
「でもユリオを喜ばせたいんだよ！　僕達が付き合って、初めての誕生日だし！
ユリオも僕の誕生日に、カツ丼ピロシキを手作りして、プレゼントしてくれたじゃないか！」
と僕が腕を振って力説する。

僕の誕生日は、たまたま僕もユリオも練習が休みで、リリアの家にお呼ばれして、お祝いをして貰った。
ユリオから招待を受けたから、その日はリリアは不在なのかと思ったら、しっかりリリアはいて、リリアの入れてくれたジャムを入れたロシアンティーで、揚げたてで熱々の、ユリオの手作りのカツ丼ピロシキを食べた。
ユリオはどうしても揚げたての熱々を、僕に食べさせたかったらしく、僕をリリアの家に呼んだらしい。
カツ丼ビロシキはとても美味しかった。醤油も出汁も使われていないから、カツ丼とは味が程遠く、オムレツに包まれたケチャップ味のトンカツとご飯の入った、カツ丼ピ

Dシキというか、オムライスピロシキだったけど。
「美味いか？」
と心配そうな顔をするユリオの顔が、
「美味しいよ！」
と答えると、一瞬でとても得意げな、満足げな顔に変わったのが、可愛かった。

カツ丼ピロシキを食べ終わった後、ユリオの部屋に案内されて、リリアの趣味全開の、ゴージャスでデコラティブな初めて入るユリオの部屋を一通り見学した後、「誕生日を祝ってくれてありがとう」と改めてお礼を言って、ハグをしてキスをすると、ドアのノックの音がして、僕達は慌てて離れた。
リリアがお茶を持ってきたのだ。
リリアは、お茶を置いた後、目を光らせて僕をギロッと鼻息荒く睨んだ。
「分かってるわね！？」
とその目が強く語っていたので、僕は無言でブンブン必死で頷いた。
リリアはお茶を置いて部屋から出ていく。

監視されている。隠しカメラくらい仕掛けられているかもしれない…。それ以上、何かをする気にはとてもじゃないけどなれなかった。
仕方なく、僕達が話をしながらお茶を飲んでいると、20分もしないで、ノックの音がして、リリアがお茶のお代わりと、リリアが焼いたという僕の誕生日のケーキを持ってきて、その後ろからヤコフが入ってきて、そこからまた僕の誕生日会になった。

ヤコフに、僕とユリオはなぜか色々と、スケートや生活態度についての説教をされながら、ケーキを食べた。
リリアは、ケーキを食べ終わり、お茶を飲み終わっても、ユリオの部屋から出て行こうとはしなかった。あまり喋ることもなかったけど、椅子に座り、じっと僕達を監視している。
リリアの、僕とユリオを二人っきりにさせまいという確固たる強い意志を感じた。
その後、リリアに夕食をご馳走になったし、家まで送って貰ったし、とても親切にして貰ったけど。正直、怖かった……。
それが僕の色気のない誕生日だった。
お金の掛かった誕生日会じゃなかったけれど、ユリオの手作りの食べ物を食べるのは初めてだったし。レシピのないカツ丼ピロシキを作るため、リリアに相談しながら、随分、練習したみたいだったから、僕はそのユリオの気持ちがとても嬉しかった。

「誕生日なんだから、たまには僕にワガママ言ってよ！」
と強く言うと、ユリオはしばらく考え込んだ後、
「じゃあ俺、カツ丼が食べたい！」
と言った。
僕は、予想外の答えに、
「はぁ？！」
と間抜けな声をあげた。
カツ丼？　この辺りにカツ丼が食べられるような、日本食料理屋があっただろうか？！
「作れるだろ？カツ丼！　俺が真似しても、全然あの味にならないんだよ！」
とユリオが目をキラキラと輝かせる。
作る？！　カツ丼を？！
「楽しみにしてるぜ！　カツ丼の手作りのカツ丼！」
とユリオがニッと歯を見せて笑う。
ちょっ、ちょっと待って。カツ丼なんか僕、作ったことないよ！　包丁だってまともに持ったことないのに！
海外で日本人だと聞くと、忍術が使えるかと聞かれたり、空手を見せてくれと言われるって話を聞いたことがあるけど、日本人だからって誰でも空手ができないように、日本人だからって、誰もが日本食を作れる訳じゃない！！
でもユリオがあまりに嬉しそうに、魅力的に笑うから、誕生日に何でもワガママを言ってよ、と言った手前、僕には作れないとは言えなかった。
「うん。楽しみにしてて」
と僕の口が勝手にそう答えてた。あぁ、どうしよう……。

自慢する訳じゃないけど、僕は悪名高き九州男児で、実家にいる頃は家事なんか一切したことなかった。
黙っていても何でもして貰えたし、男子厨房に入らずで、厨房に入ろうとすると、そんなことを跡取りの長男のお前はしなくて良いと、両親や親戚から叱られた。
家の手伝いなんか一切せずに、スケートに没頭してきた。その代わり、姉の万利ねーちゃんは、家のことをやらされまくったとかで、僕だけずるいといつもブーブー文句を言っては、また怒られていた。今になってみると、結果的に僕は跡を継ぐことはなく、万利ねーちゃんが家業を継いでいるから、多少は申し訳なかったと思う。
家を出てからは、さすがに必要に迫られ、身の回りのことを自分でするようになったけど、料理だけはできるようにならなかった。
合宿中なら栄養ばっちりの食事が出てきたし、太りやすいのにアスリートの僕は、常時食事制限がマストだったから、食事といえば、ぶつ切りの鶏肉ともやしと冷凍のブロッコリーをレンジでチンして、ドレッシングだったり、醤油だったり、ポン酢などの超簡単で、味を変えて毎日食べるという味気ない食事を続けていた。
鶏肉ともやしとブロッコリーに掛ける調味料として、家には醤油や白だしがあったけど。日常的にまともな自炊な

んかしていない。
　包丁だって持ってない。あるのはキッチンバサミと、レンジ用調理器のルクエだけだった。キッチンバサミで適当に切った鶏肉と、冷凍のブロッコリーと、洗ったもやしを放り込んで、レンジでチンして、皿に移すこともなくルクエをそのまま器にして食べるのが、僕の毎日の食事だった。
　お湯を沸かすための鍋はあるけど、炊飯器だってない。レンジで二分で食べられる、パックのご飯は実家から送られてくるから、あるけれど。
　カツ丼を作る練習をしないといけない！　僕は慌てて、カツ丼の作り方をネットで調べた。

　とりあえず、簡単なカツ丼は、めんつゆと砂糖で作れるらしい。めんつゆは実家から、頂き物のそうめんと一緒に送られてきたのがあったし、砂糖はコーヒーにたまに入れるためのスティックシュガーがあるから、これでイケるだろう…。
　実家で出てくるような、ちゃんと出汁を取って作ったカツ丼には、遠く及ばないだろうけど。それでもまぁそれなりの味にはなるだろう。ケチャップ味よりは少なくとも近い味が出せるだろう。
　僕はトンカツを作るために、油を買い、揚げ焼きができるように分厚くて深めのフライパンを買い、包丁とまな板と食材を買って、カツ丼を作る練習をした。

　料理をまともにしたことがない人間が、いきなり揚げ物に挑戦するのは難易度が高い。ネットの前情報で、多めの油で焼く揚げ焼きでお茶を濁すことにした。
　日本のようにトンカツを惣菜で買えれば、それを使えれば楽なんだけど、ここはロシアだから、スーパーでトンカツなんか売ってないから、自分でトンカツを作るしかない。
　せっかくなら、米もパックじゃないものにしようと、日本のお米を買ってきて、鍋でご飯も炊いてみた。
　鍋でご飯を炊くのは、結構難しくて、何度も炊く練習をする羽目になった。
　初めて揚げたトンカツは真っ黒になって、とても食べられるものじゃなかった。
　米は焦げたり、おかゆになったりと散々だった。
　玉ねぎは目に沁みたし、手が滑って、指を切った。上手く薄く切れなくて、幅が不揃いだった。
　洗い物はめんどくさかった。
　結局、結構な額のプレゼントと同じくらいの出費になった。

　ユリオの誕生日はもうすぐだ。
　そういえば、僕の家にカツ丼を食べに来るのをリリアは許すのだろうか？もしかしたら、リリアの家のキッチンで、監視されながら作らされるのかもしれないなと思い、
「ユリオの誕生日の件だけど。カツ丼、僕の家に食べに来

るってことでいいの？」
とユリオに聞いた。
それを聞いた、ユリオは超得意げな顔をして、胸を張って、
「誕生日の日は、カツ丼の家に泊まりに行くぜ！」
と鼻高々で言った。
「えっ？！　よくあのリリアが外泊を許したね！　世界選手権前の大事な時期なのに！」
と僕が奇声を上げると、
「リリアとめっちゃくちゃ喧嘩して、誕生日プレゼントとして外泊許可を勝ち取った！」
とガッツポーズを決める。
……相当喧嘩したのだろう。あのリリアが折れるなんて相当だ。

ユリオの誕生日の前日、僕はリリアに呼び止められた。
「ユウリ・カツキ。分かってるわね？！」
とギラギラ光る、メドューサのような目で睨まれた。
「わっ、分かってます！」
と僕は咄嗟にビシッと姿勢を正し、奇声を上げる。
「隠そうとしても、私の目は誤魔化せませんからね！
ユーリ・プリセツキーにも言い聞かせましたが、間違いがあったら容赦なく、あなたを警察に突き出しますからね！」
とありえないくらい近距離から、血走りつつも白目気味のホラーのような目で睨まれた。超怖い…。呪われる…。
「分かってます！分かってます！」
僕は何度も、頭をペコペコ繰り返し下げながら、分かってるを連呼する。
とてもじゃないけど、リリアに呪われそうで手は出せそうにない…。

誕生日のプレゼントは、形に残るものが良いんじゃないかと思っていたけど、結局、プレゼントを用意できなかった。
ユリオの誕生日当日の、3月1日。ユリオが僕の家に泊まりに来て、僕はカツ丼を作った。
めちゃくちゃ手際が悪くて、洗い物を増やしまくって、練習通りに、何とか鍋で米を炊き、玉ねぎを涙目で荒く不揃いに切り、跳ねる油にドキドキしながら、フライパンに多めの油を入れて、トンカツを何とか揚げ焼きし、めんつゆと砂糖の簡単味付けでカツ丼を作った。
日本人向けスーパーで買ってきた生でも食べられるという卵で、トロトロに似るのが難しかったけど、何度か練習した甲斐もあり、何とかそれっぽいカツ丼が作れた。
あんまり良い色じゃないし、フォトジェニックじゃなくて、インスタ映えしそうにないけど。
味噌汁まで作る余裕はなくて、実家から送られてきたイ

ンスタントの味噌汁と一緒に出すと、ユリオが目を輝かせて、
「うまそぉおお！！」
と奇声をあげて喜んで、写真を撮りまくっている。
「いただきます！」
と僕の真似してパンと手を鳴らして、ガツガツワイルドに掻き込み始める。
「うめぇえええええっ！」
と興奮して奇声をあげるユリオに、僕はホッとする。口に合ったようで良かった…。
「僕の家で出てくる、プロの料理人が作るカツ丼ほどは、美味しくないと思うけど…」
と思わず謙遜すると、
「でもこのカツ丼、超美味いぜ！　マジでウメェ！」
と、ご飯粒を飛ばしながら、興奮して腕を振り回して力説するから、思わず笑ってしまった。本当に子供だ。
リリアが心配しなくっても、こんな子供にまだ手なんか出せないよ…。

「あ、17歳の誕生日おめでとう」
と改めて思い出して言うと、
「サンキュ！」
とまたニッと嬉しそうに笑う。

「そうだ。ケーキ買うの忘れてた。ごめん。気が利かなくて。
せっかくだから、形に残るものをプレゼントしたかったんだけど…」
僕はカツ丼を上手く作ることに頭がいっぱいで、すっかりケーキを買ってくるのを忘れていた。
プレゼントは何か別に用意しようと思っていたけれど、迷ってる間に今日が来てしまった。
「残るだろ？　写真も撮ったし。一緒に美味しいものを食べるって最高じゃん！最高の誕生日の思い出だぜ？」
と言って、意外と僕にワガママを言ってくれない、安上がりなユリオが幸せそうに笑うから、僕もとても幸せな気持ちになる。
僕達はゲーム以外の趣味は、てんで合わないけど、名前はお揃いだし、食べ物の趣味は合う。大好物は僕もユリオも同じカツ丼だ。
僕達は一緒にゲームをして、同じものを食べて、笑ったり、幸福な気持ちになったりできる。

「カツ丼、料理上手なんだな！　また作ってくれよ！」
と満面の笑みでリクエストされ、
「はぁ？　上手じゃないよ！　料理なんか普段、ほとんどしないし！　カツ丼なんか初めて作ったんだから！
ほら見てよ。包丁で指、切っちゃったくらいだし」

と僕は、指に絆創膏の巻かれた手を見せると、
「あー、サンキュ」
と指で僕の指をよしよしと撫でながら、苦笑いする。
「ユリオに喜んで欲しくて頑張って、カツ丼を作るの練習したんだよ。プレゼントを買う方がずっと楽だったよ」
と僕が思わず本音を漏らすと、
「最高の誕生日だぜ！」
と言って、首にしがみ付かれて、頬に音を立ててキスをされた。

そのまま、ユリオを抱きしめて、夢中になって、キスをしていたら、胸を押し返されて、
「わりーけど…」
とユリオが赤い顔をちょっと背けて、困ったような顔でごにょごにょ言った。
「分かってるよ」
と僕は答えて、ユリオの頭をよしよしと撫でる。
ユリオもリリアと約束させられてきたのだろう。こう見えて真面目な子だから、約束を破ったりはしない。
「でも成人したら好きにして良いって、リリアに言わせたから！」
と不安そうな、いかにも必死な目で言い訳するユリオのおでこに、僕のおでこをくっつけて、
「楽しみにしてるよ」
と僕は笑って答える。

そんなに焦らなくても大丈夫。
君が大人になるまで、ちゃんと待っててあげる。
一年後なんてすぐにやってくる。
……同時に凄く緊張するけど。
「18歳になったら、リリアの家を出て良いって言われたから、俺、カツ丼と一緒に住む！」
と突然断言されて、
「えぇっ？！」
と僕は思わず奇声をあげる。ユリオとルームメイトになるの？！いや、同棲？！
う、嬉しいけど、混乱して、頭がぐるぐるする…。
「なんだよ。俺と一緒に住むのは嫌なのかよ…」
と拗ねたように唇を尖らせるユリオに、
「嫌じゃない！嫌じゃないよ！嬉しすぎて、どうしようってなっただけ！」
と慌てて訂正した。
嬉しいよ、嬉しいけど、どんな生活になるんだろう？
一緒にスマートフォンでレシピを見ながら、大騒ぎしながらご飯を作ったり、息抜きにゲームをしたりするのかな？それはそれで楽しそうだ。うん。
「あ、そうだ。誕生日プレゼントに、あのシリーズのゲームの英語版買ってあげようか？
僕がいない時なら、僕の部屋に来れるでしょう？　英語版なら、一人で遊べるでしょ？」
と言うと、ユリオは、

「日本語版が良い」
といたずらっぽく笑って答える。
「え？　でも日本語だと、一人でできないでしょ？」
「カツ丼と一緒にやりたいんだよ！」
と二ッと笑って、ギュッと僕に甘えるようにしがみついてくる。
か、か、か、可愛い！　僕の恋人がめちゃくちゃ可愛いんですけどぉおおおおっ！
僕は必死で腕を浮かせて、ユリオに触らないようにして強い衝動に耐える。ダメだ。僕には刺激が強すぎる。

その夜、僕は間違いを犯さないよう、ユリオにベッドを譲り、ソファーで一人で寝ようとしたんだけど、一緒に寝ようとユリオが言い張るから、僕はユリオと同じベッドで手を繋いで寝た。
甘くて柔らかくて良い匂いがして、とても美味しそうなユリオが、僕にしがみつくようにして、安心しきって、子供みたいな天使の寝顔ですやすや眠っている。
だからユリオは子供なのだ。お預けを食らった大人の僕は、朝まで眠れそうにないのに。
でも仕方がない。あと一年の我慢だ。
あと一年待てば、ユリオと一緒に同じ部屋に住んで、くっついて並んで座って、ゲームをして遊んだり、リリアに邪魔されずに思う存分、イチャイチャすることもできる！

ユリオ、17歳の誕生日おめでとう。来年も、その次の来年も、これからもずっと一緒にいようね。

※小説に中に出てくるRPGゲームは、FFシリーズです。

Yum-Yum！
平成30年3月18日発行
発行元　タイニィ・アリス
御意見・御感想、御待ちしております。
本文・赤依

https://pixiv.me/tinyalice
brycolor@po.mirai.ne.jp